九戸氏が本拠地として居館を構えていた「大名館」跡

天下森を後にして、九戸神社へと向かう道の途中には「大名館」が。九戸氏累代の居館で、政実が九戸城へ移る前までの本拠地だ。そこから徒歩十数分。道に面した傾斜地の中ほどに「政実首塚」はあった。政実率いる五千が籠もった九戸城を、浅野長政・蒲生氏郷ら率いる奥州仕置軍が十倍以上の大軍で包囲。だが圧倒的な兵力差にもかかわらず城を攻めあぐねた仕置軍は、策略を用いて政実を捕らえ、仕置軍総大将・豊臣秀次が陣を敷く栗駒山の麓で首を刎ねる。言い伝えによれば、獄門に晒された首を忠臣が密かに持ち帰り、この地に塚を作り埋めたという。

村松　言い伝え、ですか？　すると本当に政実の首が埋められているかどうかは…。

高橋　本当だと思う。いや、そう信じたいね。ここは南部馬を用いての騎馬戦法を得意とした政実が、若いころ馬で駆け巡った場所だ。九戸の郷が見渡せて大名館にも近いこの地だったら、政実の魂も安らぐ筈だもの。

村松　蝦夷って、大和朝廷と無縁に暮らす東北の民につけられた呼び名の筈では？

高橋　蝦夷の代表的存在と言えば、坂上田村麻呂と戦ったアテルイ、前九年の役で滅亡した安倍一族、そして奥州藤原氏だけど、東北に生まれ育ち、東北人としての誇りを持てた人間も、広い意味での蝦夷ではないかというのが僕の考えなんだ。

政実首塚

首塚に手を合わせた二人は、九戸氏代々の祈願所・九戸神社へと歩みを進める。保管されている古い棟札の閲覧が目的だ。明治四十三年の発見当時、表面が黒ずんでいて判読不明だったが、後に赤外線写真で撮影したところ大檀那・源政実（政実）の名と天文七年の文字が浮かび上がった。

村松　源、政実…じゃあ、政実は源氏なんですか？

高橋　そうだよ。政実の先祖は、源頼朝から奥州藤原氏を滅ぼした戦さの褒美として北東北を与えられた南部光行の五男・行連だもの。ちなみに政実のライバル南部信直の先祖は光行の次男・実光だ。でもね、政実は源氏の血は引いてるけど「新しき蝦夷」としての自覚を持った男だったと思うよ。

「安東や大浦は偉い。安倍貞任や平泉の血筋を誇りとしている。なのに肝腎の我らは源氏であることすら忘れた。いかにも四百年が過ぎれば源氏の血など何の意味もない。それを言い立てたって通用する世の中ではなくなっている。俺も承知ではあるが…安東や大浦が羨ましい」

「南部はもはや源氏ではありませぬ。陸奥の民にござりましょう」

「陸奥の民？」

政実は困惑の顔で実親を見やった。

「兄者が源氏に戻りたいお気持ちは充分に分かり申すが、この土地に四百年も根付いた我らがいまだに源氏の心を抱いていては国を纏めることなどできますまい。生まれ育った故郷ではありませぬか。山や川を眺めて心が和みまする。先祖はいざ知らず、今の我らは陸奥の民となりました」

「なるほど陸奥の民か」

政実は何度も首を縦に振って、

「安東や大浦が蝦夷なら、我らとて新しき蝦夷と言うことだな」

力を得たような笑いを浮かべた。

「陸奥の地に根付く者、すなわち蝦夷だ」

政実はその言い方が気に入ったらしかった。

「辛うじて保たれた源氏の糸など、もう要らぬ。九戸党は新たな蝦夷の道を歩もう」

高橋克彦著「天を衝く」（講談社）より

九戸神社宮司から九戸政実の名が記された棟札の説明を受ける

九戸村最古の木簡である羽黒堂建立時の棟札。左はその複製

九戸氏代々の祈願所・九戸神社

九戸神社の境内には、政実を神として祀る政實神社がある。平成四年の「九戸政実公没後四百年祭」を契機に機運が盛り上がり、平成八年に建立したものだ。秀吉の陸奥支配に敢然と異議を唱えた政実は、今でも九戸村の人たちにとって崇敬の対象なのである。九戸村で二人が最後に訪れたのは、九戸氏の菩提寺・長興寺。恐らく政実の誕生当時からあったであろう巨大な銀杏が二人を迎える。

高橋　長興寺は九戸氏の教育機関でもあったから幼い頃、政実もここで勉学に励んだのだろうね。

村松　政実の最期には、この寺の住職さんが関係してたとか。

高橋　薩天和尚だね。どうしても九戸城を落とせない包囲軍が、和議の使者に仕立てたのさ。薩天を信じて城を出た政実は捕らわれの身に。利用されたと悟った薩天は自刃して果てたそうだ…やはり九戸城へ行こう！　何回も足を運んだ場所だけど、ここまで来たら行かない訳には。

既に陽は沈みかけている。急いで車に戻った二人は、再び二戸へ。史跡公園としての整備が進む九戸城は、市民憩いの場でもある。二の丸跡で車を降りると、野球部員らしき子供たちが声を張り上げ練習に励んでいた。

高橋　政実が凄いのは、戦さに明け暮れたあの時代、平地に城を作るという発想をしたところだね。

村松　当時、平城は珍しかったんですか？

高橋　それまでの城は城下から相当離れた山に石垣を築き防壁としている。平城が普及したのは秀吉の全国制覇以降だよ。信長の作った城なんかも殆ど山城だからね。

山城は確かに攻めにくいが、長い籠城戦には適さない。山の上では水の確保が難しく、城内の広さにも限界があるため充分な量の食料が備蓄できぬからだ。しかし平城なら好きなだけの広い土地に無数の米倉を並べられ、半年でも一年でも籠城することができる。防備の弱点は馬淵川と白鳥川の断崖を天然の守りとすることで解決した。攻めを得意とする九戸党に不敗の根城があれば恐れるものはないと、政実は九戸城を陸奥随一の堅城とすべく心血を注ぎ、南部宗家の本拠・三戸城を遥かに凌ぐ規模で完成させたのである。

村松　でも…いくら難攻不落といっても、戦さ上手の政実が豊臣秀吉の大軍と正面きって戦ったのは不可解ですね。兵力の差は十倍以上ですよ。

高橋　負けるのを承知で戦ったと思う。秀吉は大軍を繰り出し東北をねじ伏せようとした。従わぬ者はなで斬りにし、従う者には徹底的な服従を要求してね。南部信直はいち早く臣下の礼を取り、南部の存続を図った。けれども政実は秀吉の理不尽さを天下に問うため、あえて戦さの道を選んだ。中央権力の支配に抵抗したアテルイ、安倍一族、奥州藤原氏、そして政実。正に歴史は繰り返すだよ。僕は「天を衝く」を書きながら、蝦夷あるいは東北人であることの意味を考えてきた。つまりは中央と地方の問題だ。実は政実が直面した状況は、東北に暮らす人間が置かれてきた状況でもある。そういう意味でも今、政実を再評価していく作業が大事なんだと思う。

城を囲む敵陣に法螺貝や太鼓の音が鳴り響き、総攻撃の用意がはじめられたのである。すでに合議を終え、守りの態勢にかかっている政実軍には不安もない。

「五千に十万じゃぞ。その十万が総攻撃を仕掛けて参る。小田原攻めも二十万で囲んだと聞いておるが、結局は攻める前に北条が白旗を揚げた。だれが聞いたとて勝てぬ戦さ。今日の戦さは千年も二千年も語り継がれるに相違ない。それを思えば己れの命など惜しくない。儂のような田舎武者には過ぎた死に場所。我らはたったこれだけの数で秀吉に立ち向かっておる」

広間にざわめきが広がった。七戸家国に言われて今日の戦さの意味が分かったのである。

「勝つばかりが武者の誉れではない」

家国は声を張り上げて続けた。

「己れの命の値を相手がどれほどに見るかということも大事じゃ。秀吉は我らに十万を差し向けた。ありがたく受けねばならぬ」

おおっ、と皆は拳を上げて床を叩いた。政実は頬を紅潮させている皆を見渡して胸の高鳴りを覚えた。この瞬間、皆は死を忘れてしまっている。もともと死を覚悟で集ってくれた者たちだが、今の顔は覚悟とも違う。心を無にしている。

「我らの一人の問題ではない」

政実が口にすると広間は静まった。

「また、敵とて秀吉一人ではない。いつの世にも秀吉と変わらぬ理不尽な者が現れよう。それに対して我らは戦うのだ。未来永劫、我らの戦さが範となる」

高橋克彦著「天を衝く」（講談社）より

九戸氏の菩提寺、長興寺境内にある樹齢数百年の巨大銀杏の下で

二戸市の町並みが一望できる九戸城本丸跡

「天を衝く」ゆかりの地を訪ねる